

ブラッド兄弟のシン フォギア

龍蟹迅

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

宇宙よりやってきた地球外生命体エボルトとキルバス。

エボルトとキルバスはこの世界で何を見るか。

これより、2体の地球外生命体の物語が始まる

目次

プロローグと前日譚	1
エボル、起動	22
エボルの初戦闘	30
エボルトとシンフォギアシステム	36

プロローグと前日譚

地球に二つの光が落ちる。

一つは蒼い光、もう一つは紅い光。

二つの光は地球に流れ星のように、はたまた隕石のように落ちていく。

しかし、それぞれ違う場所へと落ちて行った。

蒼い光はアメリカへ、紅い光は日本へと。

★

『んん…ようやく着いたか。』

蒼い光は落ちるとその姿が明らかになる。

それは、奇妙な模様が描かれた白い立方体の箱。

その箱から蒼いゲル状の物が現れ白い箱を包んで行く。

次第に、白い箱は蒼いゲル状の物へと消えていく。

蒼いゲル状の物は白い箱を仕舞うとその姿を変えていく。

その姿はまるで蜘蛛のような形へと。

『さあーて……………あ?』

蒼い蜘蛛は何かに気付き、辺りを見渡す。

『……………エボルトがいねえ!』

蒼い蜘蛛にとって弟である「エボルト」は蒼い蜘蛛の近くにおらず、蒼い蜘蛛のみしかいない。

『マジか……エボルトと離れ離れになるとは……。』

蒼い蜘蛛はエボルトと呼ばれる存在がいらないことに暫く落胆していた。

少しして、蒼い蜘蛛は移動を始める。

憑依する為に必要な肉体を求めて。

★

一方、日本へと落ちた紅い光も蒼い蜘蛛と同じ行動を取り始めていた。

箱は蒼い蜘蛛のと同じ様に奇妙な模様が描かれた立方体の箱だが、蒼い蜘蛛のと違い黒い。

黒い箱から出てきた紅いゲル状のものは黒い箱を仕舞うと姿をコブラへと変えた。

『さあーて、着いたのは良いが兄貴がいねえしなあ……。まあ、兄貴なら大丈夫だろうが……………』

紅いコブラは、不安がつもるもののやる事はやらなくてはと憑依する肉体を探し出す。

紅いコブラはあちらこちら探す中々、丁度いい肉体が見つからず迷っていた。

『……ん。仕方ねえ成り行きに任すか。』

紅いコブラは丁度いい肉体を探すのを諦め、近くにいた女性に取り憑こうとする。

『プアアアアアアアアアアアン』

『ん？なんだ？』

電車のような音が聞こえ、辺りを見渡すがそれらしきものは見当たらなかった。

どうやら女性も、周りにいた人達もその音が聞こえたのか、辺りを見渡していた。

『まあ、いいか……。』

紅いコブラは気にせず、女性に取り憑いた。

それが「妊婦」だと知らずに。

くブラッド兄弟のシンフォギアく

《『いや、これはどうなってるんだろくなく。ハハハ……目覚めたら“死にかけ”とか笑えねえだろ。』》

紅いコブラが目を覚ますと目の前の状況は悲惨な状況になっていた。

辺りの建造物は崩壊しており、前方には奇妙な怪物がこちらに迫っていた。

近くには変わった格好をして折れた槍を持った女性がこちらに呼びかけていた。

つまりは大ピンチという訳だ。

しかも、驚く事に取り憑いていたと思われた女性が少女に変わっていた。

しかもその少女は現在瀕死状態だという状況だ。

「おい！起きろ！死ぬな！」

《『無理言うんじゃねえ！この状況どうしろと言うんだよ！』》

女性の叫び声に紅いコブラは思わずつつこむ。

しかし、紅いコブラの叫び声は女性には届かないため意味が無い。

「生きざるのを諦めるな！」

《『それより後ろ！なんか見るからにヤベー奴が迫ってきてるんだが!?!』》

紅いコブラは女性に奇妙な怪物が迫ってきてる事を伝えようとするが、女性には全くもって届かない。

《『仕方ねえ……。頼む！動いてくれよ！』》

紅いコブラは何とか少女の腕を操って女性の後ろを指さす。

女性はその指差す方向を見て苦い顔をする。

そこへ、同じ様に変わった格好の青い髪の女性がやって来る。

女性は青い髪の女性に少女を託し、奇妙な怪物達の前に立つ。

そして、手に持っていた折れた槍を上に向けた。

「まさか……。『絶唱』を歌う気!？」

《『絶唱……。てのがなんなのかわかんねえが明らかにヤバいもんだってのがわかるなあ。』》

……っておおいおい！まさか命に関わるやつか!？」

紅いコブラは青い髪の女性が言った絶唱という言葉と顔の表情を見て命に関わるものだということが直ぐに分かった。

《『待て待て待てえ!!自分で「生きるのを諦めるな!」とか言ったくせに自分で生きるのを諦めるつもりか!?!おおい待てえ!!』》

紅いコブラは必死に手を伸ばすが、限界だったのかぼとりと落ちた。

《『くっそが!!これが限界かよ!?!頼む!!もう少しもってくれ!!』》

そんな、紅いコブラの必死の願いも届かず、怪物達は迫ってくる。
青い髪の女性も必死に呼びかけて止めようとする。

しかし、女性は槍を一切下ろさず絶唱を歌い始めようとする。

「ダメエエエエエエエエ!!!」

《『くっそがああああああああ!!!』》

【LAUNCHER ON】

『ドゴオオオオオオオオオオン!』

「!?!」

《『な、なんだあ!?!』》

突如として怪物達に向かって大量のミサイルが飛んできた。

女性達と紅いコブラは訳がわからず戸惑っていると。

【OOO!】

高速飛行で残った怪物達に特攻を仕掛ける何かが現れた。

それは頭が赤い鳥、両腕が虎柄の爪、足が緑という見た目で、背中に『2010』と書かれたプレートがある。

【WARD!】

途端、その怪人の姿が変わる。

顔は粉々に割れてしまった宝石、後頭部の装飾は異形の怪物の鷲掴んだ手を連想させ、目はドクロのように落ち窪んでいるものの瞳は存在し、こめかみからリングが生えており、マントのようなものを羽織っているようで、まるで絶望の魔法使いのようだ。

その怪人は上に魔法陣を出現させ、腕を通す。

すると、その腕は巨大化した。

紅いコブラ達が驚愕にみちていると怪物はその巨大化した腕を振り払う。

その少女巨大な腕によって残った怪物達は跡形もなく消えて無くなった。

怪人は辺りを見渡すところらに向き直り歩いてきた。

【ZIO】

また、怪人の姿が変わる。

今度は、白目を向き剥き出しとなった歯茎はさながら「仮面」を剥がされた人体模型

のようになっていて、一言で言うなら「皮膚を剥がされて筋肉がむき出しになった人の顔」のようだ。

顔には時計の針を模したアンテナがあり、そのアンテナは途中で折れ曲がっており、長針と短針の位置が1時50分を指していた。頭部と胸部には年号2019が刻まれたコアのような部位がある。

他にも両目の下部にZ i | Oと2019の文字がある。

身体は白い身体となっていた。

怪人はそのまま、折れた槍を持った女性へと向かって歩く。

「……………おい。」

その怪人が呟くと女性に掴みかかる。

「自分で「生きているのを諦めるな」と言っておいて自ら命を投げ捨てるか？」

その声は怒っているようで、女性を睨みつける。

その後、掴むのを辞めると少女の近くに来て座り込み、頭を撫でる。

「安心しろ。お前は助かる。俺が保証する。」

怪人はそう言うのと少女に時計のような物を握らせ、立ち上がり何処かへと去っていく。

怪人の目の前に幾つもの時計と歯車で出来たゲートらしきものが現れる。

「ま、待て！」

女性が叫ぶ。

その声に怪人は立ち止まり、女性の方を向く。

「あんた……何者だ？」

女性が尋ねる。

怪人は少し視線を逸らしてかんがえる。

やがて、怪人はこちらを向き、名乗った。

「俺は、全アナザーライダーの力を統べ、未来を見透す裏の王者。アナザージオウ。」

怪人『アナザージオウ』は手を振り、ゲートへと入って消えていった。

残ったのは女性二人と紅いコブラが取り憑いている少女のみだった。

★

あれから時が経ち、少女の様態も良くなった。

しかし、新たな問題が発生した。

迫害だ。

紅いコブラは途中で目が覚めて状況が飲み込めなかったが、『ツヴァイウィング事件』に紅いコブラが取り憑いている少女が巻き込まれた。

少女『立花響』はその事件の生き残りの一人であったが、周囲の人間は立花響が「人

殺し」等と言って迫害を起こしていた。

《………チツ、胸クソ悪いな……。人間の中にはこんなにも愚かな奴らもいんのかよ。》

紅いコブラは周囲にいる人間を睨む。

周囲の人間はヒソヒソと話していたり、立花響を睨みつけたりとしている。

遠くにいる黒髪の少女は勇気がないのか困った顔でこちらを見ていた。

《あの子は良い子だなあ。確か小日向未来だったか？いい友達じゃねえか。けど、中々勇気が無くて助けられないと言った感じが。全くどいつもこいつも………》

身勝手な奴らだなあ………あ？」

突如として紅いコブラは、自分が立花響の口から声を出していたことに気づく。

紅いコブラはまさかと思ひ、手を動かす。

少女の身体を自由に動かせることに、赤いコブラは内心喜んでいた。

(突然喋れるようになったり、身体動かせるようになったり、運がいいな。)

「おい今なんて言った!？」

紅いコブラは内心喜んでいて、近くの少年が立花響に掴みかかる。

それを見て紅いコブラはニヤリと笑い少年の手首を掴む。

『オラア!!』

「うわあ!？」

紅いコブラは少年を軽々と投げ付ける。

周囲の人間は立花響が少年を投げつけたことに驚きを隠せずにいた。

紅いコブラはそんな周囲の人間を他所に黒い箱『パンドラボックス』を取り出す。

紅いコブラはそのパンドラボックスから二つの物体を取り出した。

一つはコードの付いた黒い銃『トランスチームガン』。

もう一つはコブラの見た目をした血の色に近いボトル『コブラエボルボトル』。

『『まだこれくらいしか出来ないか……まあ仕方ねえな。』』

【コブラー!】

紅いコブラはトランスチームガンのスロットにコブラエボルボトルをセットする。

トランスチームガンから待機音が流れ始め、紅いコブラはトランスチームガンを下に

向けニヤリと笑い、呟く。

『蒸血』

【ミストマツチ！】

紅いコブラがトランスチームガンの引き金を引くと銃口から黒煙が吹き出す。銃口から吹き出した黒煙に立花響の身体は包まれる。

【コ・コブラ……コブラ……ファイヤー！】

黒煙が晴れるとその中から現れたのは立花響では無い別の存在。

血のように赤いワインレッドをイメージカラーとするダークヒーローの様な容姿。顔と胸部にコブラの意匠があり、頭には煙突のような角がある。

上半身にはパイプ状の物が付けられている。

『さあて……………』

紅いコブラは首を回すと周囲の人間を睨みつける。

『俺の名は『エボルト・ブラッド』。ちよつと俺とお話しようか？』

紅いコブラ『エボルト』はそう言うのと近くの机に腰掛ける。

周囲の人間はエボルトの異質さに恐怖を覚えていた。

扉に近い人間が逃げようとする。

『ズキユウウウン』

『おい、逃げんじゃねえよ……。散々立花響を迫害して、調子に乗ってんじゃねえぞ。』
エボルトはトランスチームガンでその動きを止める。

逃げようとした生徒は突然の狙撃に腰を抜かしてしまった。

その目は恐怖していた。

『怖いかな？だがなア。こいつはもつと怖い思いをしたんだぞ？バケモンが襲いかかってきて、更には生命を危機にさえ陥ったんだぞ？それをお前らは人殺し？ハッ、笑えねえなあ。なあお前ら。お前らは立花響人を殺した所を見たのか？』

エボルトが周囲を睨みながら尋ねる。

しかし、周囲の生徒は全く答えず下を向いて黙っていた。

『見たのかって聞いてんだよ!!!』

その様子にエボルトはイラついて怒声を響かせる。

生徒達はその怒声に驚き、慌てて首を横に振る。

『見てねえだろ？なのにお前らは目の前の情報を鵜呑みにして、勝手に立花響を人殺し扱いした。普通なら良く考えてからそうするもんだ。だがお前らはそうしなかった。何故か？簡単だ。お前らが愚かな人間だからだ。』

エボルトの言葉に反論しようとするが、エボルトから放たれるオーラによって何も言えずにいた。

「……………あの。」

『ん？なんだ？』

黒髪の少女『小日向未来』がエボルトに声を掛ける。

エボルトは小日向未来に視線を向け、なんの用か尋ねる。

「響は……人を殺してないんですよね？」

『……フツ……フハハツ………やっぱりお前は良い子だなあ、他の奴らとは違って。』

エボルトはそう言うのと立ち上がり小日向未来へと向かって行き、頭を撫でる。

『安心しろ。立花響は人を殺しちやいねえ。近くで見えていた俺が保証する。』

「……………良かった。」

その言葉を聞いて、小日向未来は安堵のため息をする。

『さてと、俺は立花響を保健室に連れて行く。先生には具合が悪くなつて保健室に行つてると伝えてくれ。ああそれと、また立花響になにかしようとするれば、今度はタダじゃおかないからな？それじゃ、ciao。』

エボルトは言うだけ言うのと保健室へと歩いて行く。

少しでも、立花響を安静にしとこうと考えての行動だ。

「あの！エボルトさん！ありがとうございますー！」

後ろで小日向未来がお礼をする。

エボルトはその声に手を振ることで返事する。

★

「……………あれ？」

放課後。

立花響は保健室で目が覚める。

「何故ここににいるのか、把握しきれず起き上がり、周囲を確認する。

「響？」

「あ……………未来……………」

その時、小日向未来がやって来て立花響の隣に来る。

「大丈夫？響、途中で倒れちゃったみたいだから。」

「……………うん、大丈夫だよ。へいき、へっちゃら。」

立花響そう言って笑顔を浮かべる。

小日向未来はそんな立花響に「もうっ」って言って笑う。

内心では、安心していた。

「響、一緒に帰ろ？」

「えっ？もうそんな時間なの？あ……………でも……………」

「私は大丈夫だよ。だから、ね？一緒に帰ろ？」

「……………うん。」

立花響は答えると起き上がり、小日向未来と一緒に帰宅する。

《『ううう……………！小日向未来……………。やっぱりお前は良い子だ……………！』》

エボルトはそんな様子を見て泣きそうになっていた。

★

夕日が灯る公園で二人はブランコに座っていた。

「ごめんね、未来。迷惑かけちゃって。」

「響、私は大丈夫だよ。私は響がいればそれだけで安心するから。」

「未来……………」

《『……………なんだ？なんか甘く感じるのは俺だけか？』》

二人はその後、楽しく笑いあい、話し合っていた。

そろそろ時間だと思い、二人は帰ろうかと話していた時だった。

「……………なんだ。先客がいたか。」

声がかかる。

その方向に向いてみれば銀髪蒼眼の青年が二人を見ていた。

その顔を見て二人は一瞬ゾツとした。

全く感情を感じなかった。

エボルトも少し警戒して何時でも戦闘態勢を取れるようにする。

「なにかあったのか？こんな所で座っているなんて。それもブランコに。」

「え、ええと。」

「無理なら言わなくていい。拒否権はお前だけのものだ。」

銀髪蒼眼の青年はそう言うと言に持っていた珈琲も飲む。

近くの柵に腰掛け空をみつめる。

「そう言えば、最近迫害とか下らない事が広がっているがなにかあったのか？俺は最近旅行から帰ってきたばかりだからわからねえが。まあそれも言いたくなかったら言わなくてもいい。」

青年は珈琲をもう一度飲むと一つ、ため息をして話し始める。

「人つてのは何故、悪口や陰口をするか知ってるか？」

「「え？」」

青年の突然の問いかけに二人は困惑する。

エボルトもわからず困惑すると青年が口を開く。

「それはな、知らないからだ。」

そう言うと言青年は立ち上がる。

BGMはパラレルワールド

「その人の事をよく知らないからそんな事が言える。人の絆つてのは思つてるよりも脆い。軽いはずみで絆が壊れる事もある。だが、その中でも中々壊れない絆がある。何故か？それはその人事をよく知っているからだ。その人をよく知つているからこそ壊れない。その人の影を、闇を、知つているからこそ絆が壊れる事は無い。お前らのような。」

そう言つて青年は響と未来を見る。

二人はキョトンとしていた。

「俺はお前らの事をよく知らない。だが、だからとして悪口を言うつもりは無い。」

青年はそう言つと珈琲を一気に飲む。

そして、遠くにあるゴミ箱に向かつて空き缶を投げる。

投げられた空き缶は見事にゴミ箱へと入った。

「お前らの絆はお前らの物だ。俺には関係ない。大切にしとけよ。」

青年は腕時計を見ると立ち上がる。

どうやら時間が来たらしく、帰ろうとする。

「あ、あのー！」

「……なんだ？」

青年は立ち止まり、立花響へと視線を向ける。

「名前を……教えてください。」

立花響は青年に問いかける。

青年は少し考えると立花響の質問に答えた。

「俺は、神座出流。ただの通りすがりだ。」

青年『神座出流』はそれだけ言うと言っていった。

《『……物好きな人間もいるんだな。』》

エボルトは神座出流の事を不思議に思った。

その後二人も、帰路へとついた。

『……………ジジ……………ジ……………』

へ培養度……………現在……………13%……………まだ長い……………早く
来ないものか……………。∨

ふと、立花響の身体にノイズが走ったがそれに気づくものは誰一人としていない。

エボル、起動

あれから2年が経ち、立花響（in エボルト）は小日向未来と共にリディアン音楽院へと入学した。

あの時、エボルトが説得（脅迫）した事でいじめはそれ以降起こることはなかった。そして現在、響（in エボルト）は……。

『いや〜。あれから色々あったが。』

そう言つてエボルトは響の周りを見る。

後ろ、女の子。前、ノイズ。左、ノイズ。右、ノイズ。上空、ノイズ。

そう今現在、響は窮地に立っていた。

『立花響い！呪われすぎだろうがア!?!』

エボルトは聞こえるはずもないツツコミを叫んだ。

『ツヴァイウィングのCDを買いに言ってるだけなのにノイズ会うとか、2年前の事といい、今朝の事といい立花響は不幸すぎんだろ……。』

今朝の事と言うのは響が木の上で猫が降りられなくなっていた所を助けていたが、助けている間に授業が始まってしまったという事。

エボルトはこの状況をどうしようかと考えていると。

「Croitzalronzell Gungnir zizzl」

「Imyuteus amenohabakiritron」

《『?』この歌は……。』》

聞こえてきた歌声の方向にエボルトと響は視線を向けると風鳴翼と天羽奏が2年前と同じ格好でノイズを倒していた。

「ええええ!!翼さんに奏さん!!」

《『一度見たことあるだろ……、いや覚えてないのか。』》

「今すぐここから逃げろ!」

「は、はい!こつちだよ!」

「……うん!」

奏が響に逃げるように指示する。

響は若干驚きながらも女の子を連れて逃げようとする。

が、ノイズは逃がさないとばかりに響と女の子の前に立ち塞がった。

「なっ!?」

「しまった!」

翼と奏は直ぐに気づき、向かおうとするもノイズが邪魔で進むうにも進めない。

そうしてる間にもノイズは響と女の子にジリジリと近寄つて来る。

《『もうノイズは直ぐそこか! どうする!? 一度入れ替わつて戦うか!? いやそうだったら不味い!』》

エボルトはこの状況をどう打破する最善の行動を思考するが中々思いつかない。

「こんな所で……。」

《『ん?』》

ふと、響が声を漏らす。

「こんな所で……。」

右手に持っているウォッチを強く握る。

「こんな所で……まだ死ねない!!! この子を助けなきゃ行けないんだ!!!」

《『立花響……』》

響は女の子を助けたい思いを強く、声に出した。

そして、その声に答えるようにウォッチが光り出す。

「!?!」

「えっ!? 何!?!」

《『時計が……? いや待て! いつこの時計を取り出した!?!』》

その光はだんだんと強くなり、ノイズの動きを止め、姿を変えていく。

やがて、光が収まると持っていたウオッチは赤と黄色を基調としたウオッチへと変わった。

「え、えつと?」

響はどうしようかと悩み『ウェイクベゼル』を90度回し、起動スイッチ『ライドスターター』を押した。

『クウガ!』

『クウガライドウオッチ』から音声がなるとまた、光り出す。

今度は眩しい程の光ではなく、優しく温かい光。

《『こりゃあ……。』》

エボルトがクウガライドウオッチに驚き半分、感心半分で観察する。そして……。

「Balwisyall Nescell gungnir tron」

《『……はっ?』》

響が突然歌い出したことにエボルトは呆ける。

その間にも響の身体に様々な装甲が纏い始め、姿を変えた。

《『な、なんだとおおおおおおおおお!?』》

「嘘だろ!？」

「何故彼女がシンフォギアを!？」

響の姿は赤と黄色を基調とした装甲や籠手、そして腰にはベルトが付けられていた。

それは正しく戦士と言える者だ。

「ええええええええええ!?何これ!？」

《『いやお前も驚くんかい!!』》

響本人が一番驚いている事にエボルトがツツコミを入れる。

女の子は響の姿を見て「格好良い!」と言つて目をキラキラとさせている。

「危ない!!」

《『!オラア!』》

「うわあ!？」

響が戸惑っている間に近づいてきたノイズに、翼はいち早く気づき注意を呼び掛ける。

エボルトは響よりも先に気付き響の身体を動かしノイズを倒す。

「い、今……身体が勝手に……。」

「君はその子を守ることに集中してくれ！」

「は、はい！」

響は身体が勝手に動いたことに不思議に思うが、翼から指示を受け言われた通りに行動する。

《成程な。歌いながら戦うことで戦闘力を高めるのか。今までちよつとずつしか上がらなかつたハザードレベルも勢いを増して上がつてるしなあ。》

エボルトは戦いの様子を見ながら自身のハザードレベルを確認する。

《『よおし！漸くだ！コレで……。「しまった！」……ん？』》

エボルトはようやくある条件を満たした事に歓喜していると響が焦りの声を上げる。

何事かと思ひ見ると、上空にいたノイズが女の子目掛けて向かつて行つていた。

《『マズイ!!……チツ！仕方ねえ!!』》

エボルトは覚悟を決めたのか、響の身体から出て行き女の子へと向かう。

そして、そのゲル状の姿を人の形へと変える。

完全な人の形になるとエボルトは女の子を持ち上げ安全な場所へと跳んだ。

「……………え？」

「危なかつた……。お嬢ちゃん大丈夫か？」

「う、うん。」

響は自分の身体から現れた者に困惑。

女の子は自分を助けてくれた人物に驚く。

奏と翼はその人物の姿に驚く。

エボルトの姿は響とほぼ同じ。違うところを上げるとすればエボルトは白い髪に赤い瞳。所謂、アルビノだ。

「さあて長い事待ってたんだ。」

『エボルドライバー！』

そう言つてエボルト腰にエボルドライバーを装着する。

そして『コブラエボルボトル』と『ライダーエボルボトル』を取り出し蓋を正面に向ける。

「好き勝手暴れても良いよなあ？」

『コブラ！ライダーシステム！エボリューション！』

エボルトはエボルドライバーに2つのエボルボトルをセットする。

それと同時にエボルドライバーから待機音が鳴る。

エボルトはエボルドライバーのレバーを回す。

エボルドライバーからはクラシックの音が流れ、エボルトの前後にプラモデルのよう

なファクトリー『EVライドビルダー』が現れる。

『Are you ready?』

「変身！」

エボルトの掛け声と共にEVライドビルダーは組み合わさる。

『コブラ…コブラ…エボルコブラ！フツハツハツハツハツハ！』

エボルトの姿は完全に別のものへと変わる。

カラーは赤・青・黒・金の複雑かつ凶悪なデザイン。

そして天球儀や星座早見盤など宇宙に関連する器具がモチーフとした物が全身にあらわれている。

仮面ライダーエボル、こことは別の並行世界で地球を滅ぼす存在となる戦士がここに誕生した。

『さあて、始めるかあ!!』

エボルは大きな声を上げノイズへと向かって行った。

エボルの初戦闘

「オラよ！」

エボルトは『EVOゼノベイダーグロブ』でノイズを殴りつける。殴られたノイズはあっという間に炭へと変わる。

「シンフォギア以外でノイズを……!?!」

「案外脆いな！」

翼が何か言っているがエボルトは気にすること無くノイズを殴りつける。

空からノイズが特攻を仕掛けてくるが、エボルトはすぐさま避けてノイズに一撃を与える。

「空にいる敵なら！」

そう言つてエボルトはトランスチームガンとスチームブレードを繋げライフルモードへと変える。

更にコブラエボルボトルを抜き、トランスチームガンのフルボトルスロットに差し込む。

『コブラ！スチームショット！』

「逝つちまいなあ！」

エンドショットマズルからコブラ型のエネルギー弾が発射される。

それは上空にいるノイズ達を全て飲み込む。

「きゃあ！」

「させるかよ！」

『エレキスチーム！』

ノイズが女の子に向かってるのを見てエボルトはスチームチェンジバルブで電撃に切り替え、エレキスチームを放つ。

「お前ら！ボーとしてると守れるものも守れねえぞ！」

エボルトのその声に響きはハツとして戦闘に集中する。

「つと言つてもこの数じゃなあ……。」

エボルトがそう小さくボヤク。

上空にいるノイズを一掃出来たとしても、地上にいるノイズは未だに残ってる。

どうしようかと考えていると。

『Z I—O』

「うおっ!?!」

どこからともなく斬撃が飛んできてノイズが真つ二つになる。

エボルトは斬撃が飛んできた方向を見ると何時ぞやの怪人がいた。

「お前はあの時の……!?!」

「……………」

「あ（そっぴやあの時はまだ響の中にいて直接会ってないか）。」

エボルトはおもわず声に出してしまつたがあの時はまだ表に出れるほどのハザードレベルではなかつたため、目の前の怪人はエボルトとは全く会っていない。

そんなやり取りをしている間にノイズがエボルト達の周りに集まりだした。

怪人とエボルトはお互い背中合わせでノイズを見据える。

「俺はエボルトだ。まあ、よろしく頼む。あんたは?」

「……………アナザージオウ。」

「そうか……じゃあ行くぜ!」

エボルト達はお互い自己紹介するとノイズに向かって走り出す。

エボルトはトランスチームガンとスチームブレードを使いノイズを撃ち抜き、切り裂く。

アナザージオウはアナザークィバへと変わり、アームズモンスター達を役使して牽制する。途中、アームズモンスター達を剣や銃、ハンマーへと変形させてノイズ達を圧倒す

る。

(なんとという強さだ……!)

(あいつら……何もんだ?)

(……凄い。)

エボルト達の圧倒的な強さに翼、奏、響は戦いながらも驚く。

『コブラ! スチームアタック!』

「……バツシャーバイト。」

エボルトはアナザーキバの横スレスレにスチームアタックを、アナザーキバも同じ様にエボルトの横スレスレにバツシャーバイトを放つ。

そして、銃口の先にいたノイズを撃ち抜く。

「お前……結構やるじゃねえか。」

「……………」

『H I B I K I』

アナザーキバはアナザー響鬼に変身するとその棘棍棒に炎の剣を作り出す。

エボルトはEVレバー回して必殺技の体制に入る。

『L a d y G o!!』『エボルテックファイニッシュ!』

「オラア!!」

「ハアア!!」

二人の必殺技でノイズ達を一気に倒す。

当然、ノイズ達は耐えきれぬはずもなく炭となって消えていった。

★

その後、響達もノイズを倒し終わり一段落着いた。

そして響は事情説明の為に手錠を付けられた。

本人は驚き、エボルトは（やっぱりお前呪われてるだろ。）と内心呆れていた。

そんな事を思っていると翼がエボルトの元にやってきた。

「あの……。」

「わかっているわかってる。事情説明だろ？言われなくてもわかってる。あと、俺に手錠を付けようとしても無駄だからな？簡単に壊せるぜ。」

「わかりました。」

翼はエボルトの言う事に少し納得してアナザー響鬼の方に向かう。

エボルトは黒服の人達の所に向かおうとしたその時。

『SHINOBI』

「(シノビ?……まさか!?) 逃がすか!!」

『エレキスチーム!』

『SHINOBI』という音声にエボルトはその意図にすぐさま気づき、エレキスチームをアナザーシノビに放つ。

しかし、既にアナザーシノビは影の中へと潜りその場を去って行った。

「……逃げられたか。」

エボルトはアナザーシノビを逃がした事に悔やみ、周囲の人は何が起こったのかわからないでいた。

エボルトとシンフォギアシステム

「ようこそ！特異災害対策機動部二課へ！」

「……へ？」

（歓迎されてるなあ……。）

その後、響とエボルトは車で連れてこられたのはリディアン音楽院。響とエボルトは地下にシエルターが作られているのは知ってはいたが、そこより更に下にあるとは思わず驚いていた（エボルトはすぐになれた）。

そして部屋へと案内されるとご覧の通りクラッカーで歓迎されており垂れ幕には『熱烈歓迎、立花響様、エボルト・ブラッド様』と書かれていた。

エボルトは響をちらりと見るが当の本人は状況が理解出来ずに混乱していた。

その間に緒川という人物が響にかけられている手錠を解除した。

その後は特異災害対策機動部二課の自己紹介が始まる。

「さて！では、ここから自己紹介といこうか！」

俺は風鳴弦十郎！……、二課の司令をしている！」

「二課のの装者、風鳴翼だ。よろしく頼む。」

「同じく天羽奏だ。宜しくな。」

「翼さんのマネージャーをしています、緒川慎次と申します。よろしくお願いします。」
「ほんでもって私が、出来る女こと櫻井了子よ♪ちなみにここの設計やらも私が担当したわよ♪」

「僕はオペレーター藤堯朔也よろしくね。」

「同じくオペレーターの友里あおいよ、よろしくね。男どもに何かされたら遠慮無く相談にきなさい、そいつら絞めておくから」

(嫌ダメだろ。)

最後の友里あおいの自己紹介に対してエボルトは内心ツツコミを入れる。

「え、えつと…立花響です。」

「俺はエボルト・ブラッドだ。よろしく頼むぜ。」

「ああ、よろしく頼む。」

エボルトは自己紹介を終えるところの司令である弦十郎と握手を交わした。そしてエボルトは驚愕する。

(おい待て、なんでこいつ異様にハザードレベルが高えんだ!?! いやいやいやいやいやいやいや、普通ありえねえって!)

「よろしくお願いします、エボルトさん。」

「あ、ああ。」

弦十郎の異様に高すぎるハザードレベルにエボルトは驚愕した。

その横から慎次が出たので、エボルトは弦十郎の異常さに多少戸惑いながらも慎次と握手を交わした。

すると慎次も弦十郎程ではないにしろ、ハザードレベルが高かった事に驚愕する。

（お前もか!?!）

エボルトは思わず手を顔に当てて上を向いてしまう。

「?どうした?」

「どうしましたか?」

「……………何でもねえ。」

「?」

エボルトはこの時あまり逆らわれない様に（元から逆らうつもりは無いが）と決心する。その後もエボルトは特機部二（特異災害対策機動部二課の略称）の何人かと握手をした。

しかし、その中で妙な感覚と奇妙なハザードレベルを持った人間が一人いた。

エボルトはその人物を見るが特にこれといった違和感が無いので今は保留にすることにした。

「さてと自己紹介をしたんだアンタらが何者か教えてくれないか。」

「ああ、構わない。……だが一つだけいいか?」

「なんだ?」

「……………いつまでその姿をしているつもりなんだ?」

弦十郎に言われエボルトは自身の姿を見る。

エボルトの姿は先程の戦闘の前になっていた響（アルビノver.）の姿になっていた。
た。

「そうだな。いつまでもこの姿だと色々と不便だしな。後、未来が怖えし。」

最後の方を小さく言った後、エボルトはその姿を変える。

その姿は革ジャンを着た中年の男性と言ってもいい姿へと変わった。

それを見て特機部二の職員達と響は驚いた。

「す、姿を変えた……!?!」

「俺にかかればこれぐらい簡単だ。ああそれと、俺に関してはお前達の事を説明しても
ら?た後に説明する。良いな?」

「あ、ああ。構わない。」

弦十郎は多少戸惑いながらも響とエボルトに事情を説明した。

????????????????

「なるほど。聖遺物にシンフォギアねえ。」

ノイズに対抗できる唯一の力『シンフォギアシステム』

対ノイズに対抗できる圧倒的な戦闘力を持つほか、それ以外でも戦況を左右するほどのものである。それ故シンフォギアシステムの保有は、現行の憲法では非常に危うい位置づけとなるため、周辺諸外国の目や日米安全保障条約を鑑みて、その存在を秘匿するとの政府判断が下されている。

そしてそのシンフォギアを生み出すのに必要なのが聖遺物である。

聖遺物には現代の科学力では解明することができない異端技術が使われている。その異端技術こそが重要であり、ノイズに対抗できる力となっている。

そして、その聖遺物を使って生み出されたのがシンフォギアシステムである。

「響。ここまで理解出来たか？」

「え、えくと……シンフォギアがノイズに対抗できるという所までは……。」

「……まあそこまで分かっているならまだ大丈夫だろ。」

エボルトは響を見てやれやれとなりながらもシンフォギアシステムを開発した櫻井了子へと視線を向ける。

「あんたとは仲良く出来そうだな。俺も創ることに関しては得意なんだ。」

「あら、そうなの？」

「ああ。このエボルドライバーも俺が作ったやつなんだよ。」

そう言つてエボルトは先程の戦闘でも使つたエボルドライバーを取り出して見せた。

「なるほど……とところでそろそろそちらの話聞かせてくれるか。」

「おつとそうだったな。さて、俺達のことを教えてやろうか。」

「……………達？」

翼はエボルトの「俺達」の言葉に疑問を抱く。そして不意に響の方を向くがエボルトは首を振る。

「言つておくが響は無関係だぜ。本来なら『兄貴』ここにいるはずだがどうやら違ふところに行つちまつたみたいだしなあ。」

「……兄さんがいたんだな。」

「……以外だ。」

「そ……聞こえてるからな。」

エボルトは奏と翼にそういつた後に自分達の事に関して話し始めた。

「……………」

「成程、宇宙からの訪問者と言う訳か。」

「ああそう言うこつた。この地球で言う言わば『地球外生命体』つて奴だ。」

「……………」
 惣十郎はエボルトの説明に成程つと納得する。

エボルトの話を書き纏めるとこういった感じだ。

エボルトは別の星からやって来た生命体で、地球には興味を持ってやって来たと言っている。

その際、エボルトの兄『キルバス』も一緒に地球に来たのだが、どうやら来る途中で軌道がズレたらしく別々の所に到着してしまっただけらしい。

到着した後は憑依する為の肉体を探し、近くにいた女性に取り憑いた。

しかし、どうやらその女性は妊婦だったらしくエボルト其方へと行ってしまいしばらくの間眠りについてしまった。

そしてようやく目が覚めたかと思えば憑依してる身体は絶体絶命のピンチの上に周りには奇妙な化け物がいた。

あの後は何とか助かり、何事も無く（実際にはあったが響の為に言わないでおくB Y エボルト）過ぎし今に至る。

「ところで一ついいか？」

「ん？なんだ？」

説明に一息ついた所でエボルトが弦十郎に質問をする。

「風鳴翼や天羽奏の持つてるペンダントがシンフォギアを纏うために必要な物だとしたら物だとしたら、何で響はそのペンダントを持つてもないのに使えたんだ？」

「それはあたしも気になった。」

エボルトの発言を聞いて奏を含めた数人がおもむろに響を見る。

本来ならシンフォギアを纏う為には赤柱の石のペンダントと聖唱が無ければならぬ。
い。

しかし響はこの二つのうち、一番重要なペンダントを所持していないにも関わらず、シンフォギアを纏っている。

その発言に弦十郎と了子は顎に手をあて、考える。

「それは我々も分かっていない。」

「その為にもその子を検査したいのだけど。」

「その前にその手を止めろ。」

了子そう言った手をワキワキとさせて響を見据える。

それを見たエボルトは響と了子の間に立ち了子を若干睨む。

了子はそれを見て「冗談よ」と笑った。

エボルトはそれを見て多少呆れながら響を渡した。念の為に釘を指して。

「すまん、了子君が。」

「いえ、別に。」

エボルトが心配そうに見てると弦十郎がエボルトに声をかけた。

エボルトは肩をすくめて問題ない事を告げる。

「それとエボルト、一つお願いがあるのだが……。」

「なんだ？」

ふと弦十郎がエボルトに鋭い視線を送りながら言う。

そんな弦十郎を見てエボルトは真面目な話なのだと察しがついた。

「この件に関しては誰にも言わないで欲しいのだが、構わないか？」

「……………なるほどな、当たり前か。いいぜ。」

エボルトは弦十郎の要求に了承した。

よく考えてみれば当たり前前の事だ。

シンフォギアシステムはノイズに対抗しうる唯一の装備であるのだが、その存在は日本の現行憲法に抵触しかねないため、それを纏う装者の存在共々完全秘匿状態となっている。

エボルトはその事をよく理解していた。

しかし、エボルトは同時にある不安があった。

「それなら弦さん、こっちからも一つお願いがあるが……。」

「げ、弦さん？俺の事か？」

「そうだが、親しみを込めての呼び方だ。それでお願い良いか？」

「う、うむ、なんだ？」

弦十郎は多少戸惑いながらもエボルトからの要求を聞いた。

「民間協力者を一人雇いたいんだが。」